



アジアに吹く風

ブルネイに赴任してわかったことのひとつに、当地の気候が思いのほか過ごしやすいという点がある。熱帯のボルネオ島に位置する国だから、一年中昼は33度前後まで気温は上がるが、夜は24度位、一日数回は緑のジャングルから心地よい風が吹き抜けてくる感じがある。一方その風のおかげで、インドネシアから山林火災に起因するヘイズ（煙霧）が流れてきて、霧というより煙のような空気に悩まされたりもする。

今年日本は大型台風は何度も襲われ、大変な思いをされた方も多いと思う。実はブルネイも例年になくこの「台風」の被害が大きかった。台風が日本に来襲する前にたびたびフィリピンで暴風雨を巻き起こすことは知られているが、その雨雲のしっぽがボルネオ島やマレー半島を覆う。そして、ブルネイやマレーシア、シンガポールで豪雨となり、時として甚大な被害をもたらすのである。そのため、暴風は吹かずとも豪雨の到来で“typhoon”を感じ「今年は台風が多くて」といった会話がブルネイや近隣国の人々の間で当たり前のようにならされている。東南アジア諸国同士の地理的つながりと同時に日本との近さを感じる瞬間である。

地図を見ればすぐわかることだが、台湾島の南端からわずか百数十キロ離れてフィリピン諸島がはじまり、すぐにボルネオ島という風に島々が続いている。日本にとってもアジアにとっても生命線となるシーレーンは東シナ海から南シナ海そしてマラッカ海峡へ続き、まさに東南アジア、ASEAN諸国のど真ん中を通過している。

今年2015年はASEAN共同体、中でもASEAN経済共同体（AEC）構築の目標年である。2007年に共同体設立の目標年次を2020年から2015年に前倒すことが決定され、詳細計画であるAECブループリントが採択された。ここでは、関税の撤廃など物品の自由な移動、サービス、投資、熟練労働者の自由な移動等から構成される「単一の市場・生産拠点」の実現が第一の柱とされる。

現在までのところ、関税に関しては比較的順調に統合が進展し、原加盟国のタイ、インドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピンに1984年加盟のブルネイを加えた「ASEAN 6」間の関税がほぼ撤廃され、残りの「CLMV」（カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム）も今年までに一部を除き関税を撤廃するべく取り組んできた。

一方で、熟練労働者の自由な移動については、エンジニアリング等8分野の自由職業サービスでの資格の相互承認協定が署名されたが、自由化が進んでいない。ブルネイでも厳格な外国人雇用許可制度が運用されるとともに自国民の優先雇用が強く指導されており、一部の産業では外国人労働者を雇用する企業から課徴金をとる制度の導入も準備中である。この分野の統合の進展は次のフェーズに期待することになるだろう。

ただ、ブルネイで観察していても、ASEAN加盟国間では、様々な領域で相互理解が進み精神的絆が形成されていると思える。例えば、加盟国は互いに大使を送り常駐させることはもちろん、加盟国から赴任した大使同士も頻りに連絡会議を行い連携を図っている。各大使館の最重要行事であるナショナルデーのレセプションには、開催国の大使のみならず加盟国の大使全員がブルネイ政府代表と共に記念のケーキカットに臨むほほえましい光景が繰り返される。ちなみにこのケーキカットは、お酒が御法度のブルネイで乾杯や鏡割りに該当するプログラムである。

本誌が発行される11月末には、ASEAN首脳会議が開かれ、ポスト2015のビジョンが合意されているはずである。法の支配や民主主義、基本的自由及び人権を原則に掲げたASEAN憲章の趣旨にのっとり、人口40万のブルネイから2億3,000万超のインドネシアに至る多様な国々が意見をまとめ、アジアに新たな風を吹かせてくれることを期待したい。

（本稿に含まれる見解は筆者個人のものであり、日本政府又は外務省を代表したものではありません。）